

新城生まれ、豊橋育ち

太田国交大臣が誕生



談笑する太田氏

東三河から大きな太陽を

頭に立ってきた。
 以来、阪神・淡路大震災の救済・復旧・復興、公共事業の見直し・削減。また平成10年秋の拓銀等の銀行が倒れる大不況の中で、「信用保証協会の特別保証制度」の創設など中小企業を守るために、全力投球。
 現在、公立小中学校の耐震化、首都高などのインフラ総点検整備、防災減災ニューディール政策などに取り組む。
 ■東三河の発展
 06年9月、公明党代表に就任後の12月17日、「小学校の時に

習字大会で表彰されたことがある」という懐かしい豊橋市公会堂での時局講演会では「日は東から昇る。可能性を秘めた東三河から大きな太陽が昇るように手助けしたい」と強調した。
 09年3月の鳥インフルエンザのウズラ感染症問題で、豊橋市議会の大澤初男議長(当時)らが農林水産省を訪れ、石破茂大臣(当時)に積極的な支援などを要望した際には、太田氏は「99年3月の鳥インフルエンザのウズラ感染症問題で、豊橋市議会の大澤初男議長(当時)らが農林水産省を訪れ、石破茂大臣(当時)に積極的な支援などを要望した際には、太田氏は」

■両親の思いを胸に
 「親父は政治が好きで、NHKのラジオ討論会を幼稚園の頃から親父の膝の上で聞いていました。「おふくろは選挙のたびに、心配し、案じてくれた。またテレビ討論に出るたびに忌憚(きたん)のない感想を寄せてくれた」。
 その両親も今は、向山の丘で、静かに眠る。そんな両親の思いを胸に、太田氏は新たな舞台の階段を上る。

■証言

■高まる期待
 京都大学土木工学科・同大学院で耐震工学を研究した地震対策のエキスパートとして、また新聞記者として磨いてきた的確な分析力・表現力と現場第一主義で、新たな舞台に挑む太田氏に、豊橋・東三河からの期待の声は大きい。



時習館高校で話す太田氏

■耐震工学を学ぶ
 61年4月、時習館高校へ進学。時は高度成長の真っただ中。そして京都大学の工学部土木工学科に進学。直後の6月に起こった新潟地震で、完成したばかりの昭和大桥が崩落した。
 ■公明新聞記者
 京都大学大学院修士課程を修了後、公明新聞社に入社。国会担当記者、論説記者として、福祉・平和問題等で健筆を振るった。

伊藤秀昭

これに衝撃を受け、「日本は地震国。やみくもに造っても、壊れては意味がない」と耐震工学を専攻。
 大学時代は相撲にも熱中した。得意技は「ぶちかまし」からの一気の「寄り」。

当時の、自民党と社会党による不毛なイデオロギー対立の政治55年体制を評して「勝負の決まったジャンケンポン政治」と二刀両断。「チヨキを出す中道の公明党によって、政治が活性化すると論じた」。

■衆議院議員初当選
 93年9月、初当選直後から「政治とカネ」「政治改革」の先

地方政治クリエイト

その傍ら学生時代の読書は「ぶちかまし」からの一気の「寄り」。

93年9月、初当選直後から「政治とカネ」「政治改革」の先

その傍ら学生時代の読書は「ぶちかまし」からの一気の「寄り」。

■立証
 県立時習館高校の同級生鈴木伊能勢さん(67)「豊橋三菱ふそう自動車販売社長は「先日、高校の同級生の前で、この国に未来はあるか」を話してもらったが、この国の未来を描き出し、展望を拓(ひら)いてほしい」。

■名豊道路の西への延伸、三遠南信自動車道、三河港をとして設楽ダム問題と地域活性化戦略に不可欠な大事業が遅々として進まず、大きなネックになっている。それだけに太田国交大臣に寄せる期待はあまりにも大きい。